

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立立川国際中等教育学校

1 次の文章は、「最適化のアルゴリズム」という、インターネット上で個人の好み合った情報が自動的に選択される仕組みについて、筆者が説明したものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

(*印のついている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

ここまでに見てきたような最適化のアルゴリズムの背景には、どのような思想が潜んでいるのでしょうか。

おそらくそれは、「人間が好きなものには一定のパターンがあり、そのパターンを学習すれば、その人間の行動は予測できる」というものではないでしょうか。

そのような予測をするには、膨大なデータベースが必要です。「私」の行動を予測するためには、まず、「私」以外の無数のユーザーが何を検索し、どんなサイトを閲覧し、何を買っているのかを把握しなければなりません。そのデータベースから、「ある特徴を持つユーザーがどんな行動をするのか」というパターンが分析されていきます。そして、そのパターンのなかに「私」を位置つけることで、「私」の行動を予測することがはじめて可能になるのです。

このような考え方は、非常に大きく言えば、世界を科学的に捉えようとする態度と通底するものです。科学は、この世界に起こる事象を法則に基づいて説明しようとしています。そこで理想とされるのは、すべての自然現象を説明することができるような、一般的な法則を解き明かすこと

です。そうした法則が解明されれば、これから起こるすべての自然現象は完全に予測可能になるでしょう。

気象予報をはじめとして、このような科学的な予測は、いまだ不確実性の残るものだとしても、私たちの日常生活にとって欠かせないものになっています。しかし、科学的に説明された自然現象からは、個性が失われます。たとえば気象予報において、降雨の法則が完全に明らかになれば、今日降った雨の状況から、明日降る雨の状況を予測することができます。科学的に考えれば、降雨の法則に同じように従うという意味において、今日の雨と明日の雨にちがいはありません。

でも、私たちはそこにちがいを感ずることもできます。たとえば、まったく同じ降水量だとしても、今日の雨はなんだか物悲しく感じ、寂しい気持ちにさせるけれど、次の日の雨は、なんだか傍に寄り添ってくれるような、親しみのある雨になるかもしれません。そのように、今日の雨と次の日の雨はまったくちがったものになるかもしれません。雨にもそうした個性があるのです。それなのに、雨を科学的に説明しようとした途端、そのちがいは失われてしまいます。雨は法則に還元され、そのときそのときの雨が持っている個性は見失われてしまうのです。

同じことが、アルゴリズムに基づく行動予測にもあてはまります。たとえば「私」はロック音楽が好きだとしましょう。しかし、同じ曲を聴いているときでも、今日聴いているときの気持ちと、明日聴いているときの気持ちは、まったくちがうかもしれません。ある曲を今までに

100回、同じような気持ちで聴いていたのに、次の1回は今までとまったくちがった印象を受け、まったくちがう気持ちになるかもしれません。音楽を聴くという体験にも、1回1回の個性があるのです。それに対して、アルゴリズムによる行動予測は、そうした個性を無視することになってしまいます。

この問題を鋭く洞察した哲学者がいます。フランスの思想家、アンリ・ベルクソン（1859—1941）です。

ベルクソンは、この世界をただ科学的にだけ説明しようとする考え方を痛烈に批判しました。彼によれば、そうした説明はこの世界を抽象的に眺めてなされるものであり、その具体的な姿を捉えることにはなりません。もちろんそれは、科学がまちがっているとか、信頼に値しないとかいうことを意味するわけではありません。ただ、それだけでは捉えつくすことのできないものが、この世界にはある、と彼は考えたのです。

まず、この世界を抽象的に眺めることと、具体的に眺めることのちがいがどこにあるのかを考えてみましょう。さしあたりそれは、「未来を予見可能なものとして捉えるか、それとも予見不可能なものとして捉えるのか」というちがいとして説明することができません。

たとえば、気象に関する科学的な知識やデータを動員すれば、「明日、雨が降る」ということを予測することはできません。このとき予測されているのは、いわば「抽象的な雨」です。つまり、いつ、どこで降る雨と

も等価であり、同じような条件であれば同じように降る雨です。それに対して「具体的な雨」は、「私」にとって個性を持っています。そしてその個性は、科学的には予測することができません。明日降る雨の量を科学的に予測することはできません。しかし、それが「私」にとってどのようなものとして経験されるのか、ということは、事前に予測することはできないのです。

「ある出来事が予見不可能である」ということは、それが「偶然に起こる」ということです。つまり、それはそのように起こらないこともできるのに、そのように起こらなければならない理由などないのに、そのように起こってしまうということです。だからこそ、この世界をその具体的な姿において眺めたとき、世界は偶然の連続であるように見えます。次の瞬間に何が、どのように起こるかは、まったくわからないのです。

ベルクソンは、こうした偶然性を前提にしなければ説明できない現象が、この世界にはあると考えました。その例として挙げられるのが、生命の進化です。生命は同じ姿のままに留まることなく、時間をかけて変化し、ときに信じられないような形態を獲得します。ベルクソンは、生命が時折見せるこうした偶然的な変化を、「創造的進化」と呼びます。

科学的な世界観に従うなら、生命の進化も含め、この世界で起こることはすべて何らかの法則に従っている、ということになるはずですが、しかし、現実の世界には、法則には還元できない、誰にも予測できないことが起こり、それによって新しいものが、それまでは思いつくこと

さえ不可能だったことが引き起こされるのです。

ベルクソンは、こうした予見不可能な創造的進化は、「私」をとり巻く*
外界の世界の事物だけではなく、「私」自身に関しても起こる、と考え
ていました。

たとえば、多くの人は、小学生のときの「私」も現在の「私」も、ど
ちらも同じ「私」だ、と考えているでしょう。そのとき、その人はおそ
らく、「私」という変わるものがない*
実体がまずあり、その実体が誕生
から小学校時代などを経て現在までの、さまざま状況に移ってきた、
というふうに理解しているのではないでしょうか。それはたとえて言え
ば、「私」を一つのボールとして捉え、そのボールの置かれる部屋が時に
つれて移っていく、しかし、同じボールであることに変わりはない、と
考えることに似ています。

しかしこれは、「私」をただのモノのように捉える考え方であり、その
意味で科学的な見方である、と言えます。それに対してベルクソンは、「人
間はあくまでも生命であり、単なるモノではない」という点を強調します。
そして生命である以上、「私」もまた、予見不可能な創造的進化を遂げる
のです。

もっとシンプルに言えば、このことは、明日の「私」がどんな人間かは、
まだわからない、ということでもあります。明日の「私」が何者であるか、
この世界をどのように感じ、どんな気持ちで生きるのかは、予測できま
せん。時間の経過が私たちの存在を、常に新しいもの、別なものに変え

ていくからです。

しかしそれは、「私」が一瞬ごとに異なるバラバラな人格になる、と
いうことではありません。確かに、昨日の「私」と今日の「私」、明日の
「私」は、それぞれ違った存在です。しかし「私」は記憶によってその
時間の経過を自分のなかに宿すことができる、とベルクソンは考えまし
た。つまり、一瞬ごとに新しい存在である人間は、同時に、これまでの
自分の歩みを「記憶」という形で保持し、それを更新しつづける存在で
もある、ということなのです。ベルクソンは、そうした記憶に宿る時間のあ
り方を「持続」と呼んでいます。

SNSを支配する最適化のアルゴリズムは、このように生きる人間の
具体的な時間を、正しく捉えることができません。なぜならアルゴリス
ムは、あるときに捉えた「私」のデータに基づいて、「私」はどんな場合
にも同じ好みを持ち、同じものに関心を寄せ、これまで関心を寄せてき
たものにこれからも関心を寄せつづけるだろう、という考えのもとに動
作するからです。しかし、それは真実ではありません。私たちは、昨日
まで関心があったことに、今日、関心がなくなるかもしれないし、ある
いは今日関心がないことに、明日、突然関心を持つかもしれないからです。
それこそが、生命の創造的進化にはかならないのです。

もっとも私は、こうした理由で、「SNSを支配するアルゴリズムによっ
て、私たちは自分自身を創造する機会——つまり今までとは異なる、新
しい存在になる機会を奪われている。だからSNSを使つのをやめよう」

と言いたいわけではありません。私たちはこれから、アルゴリズムの提供ていきょうする偶然性のない世界のなかで、これまでと同じような人と友達になるかもしれません。これまでと同じような動画を見て、同じような音楽を聴くのかもしれません。しかし大切なことは、その一回一回の体験は、それぞれが起っているということです。そして、「私」がどんな体験をするかは、実際にそれを体験するまではわかりません。そこには、アルゴリズムにも征服せいふくすることできない、生命の予見不可能性が、根本的な偶然性が潜ひそんでいるからです。

(戸谷洋志「SNSの哲学 リアルとオンラインのあいだ」)

(一部改変) による)

〔注〕

通底

共通する部分が多いこと。

還元

物事ものごとをあるべきかたちに戻すこと。

ロック音楽

音楽の種類のひとつ。

洞察

物事を観察してその奥底おくそこまで見抜くこと。

痛烈

非常に激はげしいさま。

批判

人の言動あやまの誤りや欠点を指摘してさすること。

動員

ある目的のために、ものを集めること。

形態

ある物事の、外から見た形。

外界

自分を取り巻く周りの世界。

実体

そのものの本当の姿すがた。

〔問題1〕

「このような考え方」とありますが、これはどのような考え方のことですか。六十字以上七十字以内で説明しなさい。

〔注意〕

答えは一まずめから書き、段落だんらくを変えてはいけません。

、や。や「などの記号もそれぞれ字数に数えます。

〔問題2〕

「彼かれによれば、そうした説明はこの世界を抽象ちゆうしょう的に眺ながめてなされるものであり、その具体的な姿すがたを捉とらえることにはなりません」とありますが、「具体的な姿を捉える」とは、

世界をどのように見ることであると筆者は説明していますか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。

〔注意〕

答えは一まずめから書き、段落だんらくを変えてはいけません。

、や。や「などの記号もそれぞれ字数に数えます。

〔問題3〕

筆者は本文において、人間はどのような存在そんざいであると述べていますか。また、そのような筆者の考え方はあなたの学校生活においてどのように生かせるでしょうか。以下の条件にしたがって四〇〇字以上四六〇字以内で答えなさい。

① 第一段落だんらくでは、筆者が人間はどのような存在であると述べているかを説明すること。

② 第二段落では、学校生活における具体的な場面を一つあげながら、筆者の考え方をどのように生かすか述べること。

〈注意〉

文章は必ず二段落だんらくになるようにしなさい。

書き出しや段落を変えたときの空らんは字数に数えます。

、や。や」といった記号もそれぞれ字数に数えます。